

## 「修正力」があるかどうかで

先週の金曜日に中体連スケート県・東濃大会がありました。ウインタースポーツにおいては、感染症対策を十分施した上で実施されることとなりました。県内の中学生のスケート競技人口が少なく、東濃大会がそのまま県大会となります。

本校からは三年のY・R君が出場しました。彼は五百メートルと千メートルに出場し、それぞれ3位と4位になり、一月三十日から長野市で行われる全国大会に出場することになりました。その報告のために、彼が昨日、校長室にやってきました。

「おめでとう！当日の調子はどうだったの？」  
「あまりよくありませんでした。でも、全国大会までに修正したいと思います。」

「修正って、どんなところを？」

「滑るときに前傾姿勢をとりすぎて、氷を真後ろに蹴っていました。そこを修正しようと思います。」

「ということは、前傾過ぎてもだめということ？」

「はい、頭を少し上げて……。」  
レーシングスーツを着て滑るだけあって、空気の抵抗を最大限に減らすことが大切です。同時に、氷を蹴って前に進む推進力も生み出さなければなりません。どちらも満足できたときに、「よい滑り」となるでしょう。

レース中には、リンクの近くで選手のコーチたちが熱い視線を向けて滑りを見つめながら檄（げき）を飛ばしていました。恐らくタイムだけではなく、選手の滑りを確かめていたのだと思います。滑っている選手たちは気付けなことを、コーチたちは冷静に見つめ、選手たちにはアドバイスするのでしよう。

Y・R君もコーチに滑りを見てもらってアドバイスを得たのかもしれないですね。そういう第三者からの情報をもらいながら、不十分な点に気づき修正していくことは、自分を更に高めることに直結します。つまり、分析が大切になるのです。

このことは、全てのことについて言えます。負けたときに、その敗因を突き止めて、その克服に努める。テストをしたときに、弱点に気づき、集中的に復習する。そして、うまくいかないときは、その原因をみつけて、改善を図る。そういう「修正力」があるかどうかで今後が決まります。

全国となると強豪ばかりでしょうが、修正を実現させて、自分ができる最高のパフォーマンスを見せてくれることを期待します。



見事なコーナリングを見せるY・R君